

竹島俊之先生と

ポリュビオス『世界史』

龍溪書舎主 北村 正光

2001年の4月頃でしたか、竹島俊之先生からお電話をいただき、東京駅ステーションホテルの喫茶室で、ポリュビオス『世界史』の翻訳出版をしたい旨のご相談を受けました。先生は約20年ポリュビオスを研究しておられるとのことでした。

浅学の私にはポリュビオスの名前はそれこそ初耳に近く、ハンニバル、ポエニ戦争と聞いてようやく思い出した程度の知識しか持ち合わせておりませんでした。しかしじっくりお話をうかがう内に、故飯尾都人先生と大学の先輩・後輩の関係であることや、飯尾先生との深いかわり、同じ西欧古典学者としてかなり本格派らしいな（失礼）との印象を受けました。

先生は、ポリュビオスの『世界史』について、ヘレニズム期からローマの地中海制覇への過渡期の世界を描いた、正に唯一のものであること、史実を忠実に客観的に述べる姿勢をつらぬいた歴史家で、原典からの邦訳は未だ無いこと、などをトツツと一生懸命に語りかけるようにお話下さいました。

長いご相談の末に、最後に一言私は「お受け致しますよう」と申し上げましたが、長い様で短かった先生とのお付き合いは、これよりスタートしました。

小舎はそれ迄に飯尾都人先生の訳・編で既にパウサニアス「ギリシア記」・ストラボン「ギリシア・ローマ世界地誌」・ディオドロス「神代地誌」の3点を刊行していましたが、そもそも飯尾先生との出会いこそ、私が「西欧古典」の分野に開眼するきっかけとなりました。それまで、小舎の出版ジャンルは主に中国・朝鮮・東南アジアであり、国内的には産業・経済・教育・思想・文化・報徳といった分野（いずれも近現代史）広くは社会科学全般でした。

飯尾先生の著作が次々と小舎より出版されて行く過程で、或る方が飯尾先生にそして小舎に強力な味方となりました。その方は当時、渋沢史料館の主任研究員で、既にいくつかの著書を出されておられた、塚田孝雄先生です。

中学時代よりホメロスに傾倒してコツコツ研究しておられた市井の一研究者ですが、苦勞して西欧古典の蔵書を集めておられ、パウサニアスの「ギリシア記」翻訳に際しては、飯尾先生に参考に役立つ古典本（古書）をお貸し下さったそうです。塚田先生の、対価を求めない無欲なご協力はきっと少なからず飯尾先生の翻訳作業のお役に立てたと存じます。そして飯尾先生が不治の病にかかり他界された時、やり残された部分（ごく一部ですが）を仕上げられた次女千絵さんを専門家の目でサポートされた方がこの塚田先生でした。

話が前後しますが、竹島俊之先生に対しても、『世界史』の翻訳作業の際に同じく、全面的支援を惜しまなかったばかりでなく、最終巻の校正作業中に、竹島先生が不帰の客となられた後の仕上げの作業でも、ご子息和之さんをサポートされ、内容チェックにご協力下さった方が奇しくも同じ塚田孝雄先生でした。残念なことに、この塚田孝雄先生も既に鬼籍に入っておられます。

このような方々との接触を深めながら、小舎は徐々に西欧古典の分野に入り込みました。竹島先生からの入稿は断続的に始まりましたが、翻訳作業は順調とは言い難く、予想通り長い経過を辿りました。先生もかなり苦勞されたようで、ポリュビオスの文章解釈はやはり容易なものではなかったようです。

スキピオ家の庇護を受けていたとはいえ、支配者ローマの放ち囚人でもある、優れた知識人ポリュビオスの原文の内容を正確に翻訳する為には、ギリシア語・ラテン語・等の語学力の他に歴史学の造詣を必要とし、己自身のおかれた立場・時代背景などを考慮しつつ、眼光紙背に徹する透視力でその文章の裏の意味を理解しなければならないようで、平凡な翻訳力では意味を為さない由、非常に難解極まる作業だったと想像しております。正に先生は全力投球で取り組まれました。おかげで私自身もまた大変勉強させて頂きました。

竹島先生との交流の中で知った事があります。それは日本国内での西欧古典文献の「偏在」と、その「稀少性」です。このことは私が西欧古典資料の復刻を志す契機となりましたが、その点でも先生は非常にご苦勞されたと思います。しかし、先生は真つすぐな方で、研究に誤魔化しがなく、慎重に関係する文献を涉猟しながらコツコツと、しかも楽しみながら没頭されておられましたね。私に話される時、翻訳の中味の話になりますと、生き生きと目が輝いて、あたかも何事かに夢中になった少年のような純粋さを感じました。

『世界史』出版で私は忘れ難いことが今一つあります。

或る日、突然関西の某氏が「俺は京都の〇〇と云う者だが…」と電話をかけてきて、当舎が何故ポリュビオスの出版をしたのか、要するにケシカランと言

って来たのです。私は一瞬唖然としましたが、その問答無用の高圧的な言い方、その発言の主旨を聞いて2度ビックリ。それで私も厳しく反論しました。学問研究の自由と発展を否定するような偏狭さが、今なお厳然としてあるのですね、日本の西欧古典学界の一部には。

さまざまな解釈の仕方でポリュビオスを甦らせること、それは正に知の饗宴と申すべきすばらしいことで、どなたでも自由に参加していただいて...それが日本の西欧古典学の発展に寄与するし、それによって読者はより深く古典古代の世界に溶け込み、その醍醐味を味わえると思うのです。

この件を竹島先生にお伝えしました時の先生のご返事は次のようでした。

「私は自分の翻訳作業ではウォールバンクの書と共に、時間はかかりますが、ギリシア語・ラテン語の文献だけでなく、各国語に翻訳された資料を網羅して比較し、検証しつつじっくり作業を進めています。1ヶ国語、例えば英語の翻訳本だけから翻訳したとすれば、それは随分不完全なものになるでしょう。ポリュビオスに取り組むにはそれではとても正鵠を得た訳は期し得ませんよ。私の訳本はそうではありません。どうぞご安心ください。」と。

これこそが竹島先生の学者としての姿勢だと、深く感動しました。

私のこの拙文をお読みの方々には周知の事実だと思いますが、この翻訳を超える訳書は現在全くありません。これは各方面の方より一様に頂いたお褒めの言葉でした。正に竹島先生の知的営為の結晶が、このポリュビオス『世界史 全3巻』なのです。

小舎刊『世界史 全3巻』は、今やロングセラーです。ブームのような売れかたではありませんが、今もお継続的に問い合わせやご注文を頂きます。読者の評価が極めて高いことを小舎は実感しております。

創業時、恩師からのなむけの言葉「財産になる本を作れよ」(東畑精一先生)に応え得た誇りを私は感じております。

竹島先生は翻訳作業中に発病されたようです。その事情が小舎に伝わったのは、病氣も末期に入った頃でした。しかも第2巻・3巻刊行の直前でした。広島島の病院に校正をお持ちして、お見舞いに伺った時が先生との最後のお別れとなりましたが、精一杯明るくふる舞って下さったのが痛々しく、私の目に焼きついております。

西欧古典研究の発展を願う一人として、かえすがえすも惜しい方を失ったと思ひ、一人の正統派学究の死を心から悼みつつ、今は唯、御霊のご冥福を祈るのみであります。